秩父市・大友内科医院　大友一夫

## 熊の胆（い）

昨年（令和7年）は熊の被害が頻発した。一カ月前には、とうとう私の住む町内でも熊の目撃情報があった。若い頃から山といで湯の一人旅を楽しんで来たが、熊に出会ったことは一度もない。当初は熊鈴も付けずに登山していた。ところが昨春、妙高山麓の一軒宿で部屋から熊を目撃した。宿の主人に写真を見せると、確かに熊だが、ふだんはその谷に現れることは滅多にないという。

熊の被害が続出しているので、その駆除が勧められている。しかし猟師が減少しているので、人材確保が難しくなっているという。東北のある地方では中国人にも狩猟の許可を与えている。

昔から日本では熊の狩猟が行われて来た。昭和20～30年代は、ツキノワグマ一頭の値段は村の駐在員の給料3～6カ月分と言われていた。まだ、熊の毛皮や肉、熊の胆（い）を求める人がいたのである。ところが昭和50年代頃から需要が減ったため、どんどん安くなって来た。命を張ってまでして稼ぐ仕事ではなくなったのである。

それでは江戸時代はどうだったであろうか？

後藤艮山（1659～1733）は古方を重視していたが、食事療法や民間療法も盛んに取り入れていた。灸、湯治、灌水（水被り）、蕃椒（とうがらし）などとともに、熊の胆（い）も推奨したため、湯熊灸庵とも称された。高価な薬ではなく、身近にあるやり方でも十分治療はできるのだと説いている。しかもお灸も湯治も水被りも応用範囲の広い治療法である。私もアレルギー性疾患、膠原病、風邪引き易い体質、心身症、冷え性、起立性低血圧症、発熱、疼痛などに風呂上がりの水被りを勧めている。最も手近で安い治療法である。江戸時代、熊胆も需要が多く手に入り易かったのであろう。ということは、熊は今よりもっと多く獲られたはずである。しかし絶滅することはなかった。日本人は、人のために命を落とした生物を慰霊する気持ちを持ち合わせているので、植林などと同様、生態系は保たれていたのである。近年の熊の増加は、異常気象で熊の餌が減って来たことや、メガソーラーや風力発電の開発に因るのではないかと推測されているが、猟師の減少とも無縁ではないであろう。

獣の胆嚢を使用することは古来、ギリシャやインドでも見られ、熊胆も中国や日本で薬用として利用されて来た。『大同類聚方』（808年）には、「袁久万乃以（オクマノイ）」として登場する。頻繁に使用されるようになったのは江戸時代で、恐らくは艮山の指導に因るものであろう。艮山は、後の中神琴渓や和田東郭と同様、自ら書を著さなかったが、艮山の弟子・香川修庵はその著『一本堂薬選』で、熊胆を詳述している。効能としては「療癥瘕、疝痞、痃癖、心胸痛腹痛、傷食腹痛、不吐不瀉諸癇癪、狂癡疾、痢疾、殺蟲、止嘔吐、発痘瘡、疳疾、驚癇、妊婦腹痛、産後腹痛、催生、點目去翳、塗痔止痛、一切卒患急病、用以換起元気、開通敝塞」を挙げている。「一気留滞説」を唱えた艮山は、「元気を換起」する熊胆を重宝していたのである。また「心胸痛腹痛」「一切卒患急病」も注目に値する。牛黄と共に熊胆の入った六神丸の効能は、めまい、息切れ、気付け、腹痛など多岐にわたるが、夜中に狭心痛に襲われた時の常備薬としても期待されている。熊胆の主成分はウルソデオキシコール酸で利胆作用があり、現在ではその合成品が保険適用薬として使われている。ただ修庵が説いた熊胆そのものの効能はもっと応用範囲が広く、今後検証されてしかるべきであろう。熊の存在理由を大局的に捉える良い機会でもある。